

グリーンサイエンス21便り (17)



近年の自然災害について思うこと

奥山 豊（おくやま・ゆたか）元神奈川県災害対策課

平成23年3月11日、14時46分に発生した東日本大震災から10年の歳月が過ぎました。あの時の声にもできないほどの巨大な津波や破壊された街並み等の災害映像は、今も忘れることができません。被災地の方には、自ら被災にあいながらも地域の消防団として、消火活動や捜索、身元確認のとてもつらい作業に、従事しておられましたし、現在も一部継続されておられます。

私たちが暮らす日本は、世界でも自然災害が特に多い国として有名ですが、その頻度や被害規模は年々増加しています。「天災は忘れたい頃にやってくる」と言われてい

ますが、近年では忘れる暇もないくらいに大規模な災害が起こるようになってきました。

日本の国土は、災害を受けやすい自然的条件（地形が急峻ゆえに河川は著しく急勾配）から気象災害は特に発生しやすいと言われています。

平成26年8月の広島市豪雨土砂災害は、時間降雨量121ミリを記録しています。

令和2年7月熊本豪雨による球磨川の氾濫、令和3年8月の広島県南部・北部の豪雨等いずれも線状降水帯による豪雨災害が発生しています。令和元年10月の台風19号と令和3年7月の豪雨によ

り、箱根方面で長期にわたる被害が発生しています。

忘れてならないのは、令和3年7月3日静岡県熱海市での土石流災害です。この災害の原因については明確に判定することは困難と言われていることは困難と言われていることは原因を構成する複数の要素があり、災害の誘因は大雨と言われているますが、降水量は72時間降水量408ミリ、時間降水量も30〜40ミリ（気象庁という強い雨）です。それほど大きな降水量は記録されていません。また、この場所は過去繰り返し土石流が発生して形成されてきた地形であったことも要因の一つと言われているが、土砂流をもたらした崩壊部に人工的な盛り土があったこと等が静岡県により指摘されています。

近年の気象災害は、気象システムの変動や地球温暖化等が複雑に絡み合っていると言われている。他の自然災害は東日本大震災の地震・津波災害、火山災害

も甚大な被害をもたらしています。異常気象が日常気象となつてしまったかのように常態化しています。根本対策は勿論、行政による災害危険箇所に対する防災・減災対策、速やかな情報発進等で、これらの実施が急がれますが、私たち自身で身を守る能動的行動が望まれると考えます。

